

<汀にて> 鷺田清一

## デモクラシーの時間軸 未来世代へ「恩送り」を 2026/1/28 05:30

神戸新聞 Next 神戸新聞 紙面書き写し整理

鷺田清一氏の提言:今こそ「未来世代への視点を具体的に政治や生活に取り入れて考えよう」と

要旨 Google の AI を使って、要旨をまとめ整理してみました。

- **現代民主主義の限界:** 現代の民主主義は「今を生きる世代」の合意のみで物事を決めてしまい、将来世代の視点が欠落しているという「時間軸の短さ」を指摘
- **「恩送り」の思想:** 過去から受け取った恩恵を、前の世代に返す(恩返し)のではなく、未来の世代へと繋いでいく(恩送り)という倫理観の重要性が今はかけていないか
- **社会の持続性:** 社会を維持するためには、現在の利害だけで判断せず、まだ見ぬ未来の人々に対して責任を持つという「長い時間軸」を取り戻す必要がある

思いは人それぞれですが、今 世界で起きていること、政治経済そして生活の混乱の中で、私には一番 頭にすっと入る言葉 頭の整理ができました。

何時もながら、鷺田清一先生が説かれる話には共感、教えられることが一杯です

2026.1.28. From Kobe Mutsu Naksanishi

神戸新聞 2026.1.28.朝刊「文化」紙面「汀にて」書き写し整理

## 鷺田清一 デモクラシーの時間軸 未来世代へ「恩送り」を 2026/1/28 05:30

現代社会がきわめて短期的な思考のなかで動いているとは、しばしば指摘されてきたことである。

多くの政治家が気を揉(も)むのは、国政の長期的な展望というよりは、次の選挙や直近の世論調査の動向であり、また企業家や投資家の関心はつねに四半期の成績や株価の動向に向けられ、ミリ秒単位での投機に振り回されている。金融危機にあっても、政権がまっ先にとりかかるのは金融システムの再構築よりも、破綻した銀行の救済策である。それは臨機応変の対応というよりも、むしろその場しのぎに近い。

英国の文化思想家、ローマン・クルツナリックはその著『グッド・アンセスター』(松本紹圭訳、あすなろ書房)で、そうした現代人のメンタリティを「病的な短期主義」と呼んでいる。

クルツナリックは、音楽家、ブライアン・イーノの発想を引いて、分単位、時間単位、日単位の「ショート・ナウ」から数千年とはいわずとも数百年単位の「ロング・ナウ」への現在の拡張が必要だと説く。

じっさい、「持続可能性」という概念がグローバルな合言葉になってきたのも、気候変動への対応や地球環境の保全、さらには土地の領有や生産・分配の調整などの社会的課題が人びとになによりも長期的な思考を迫るものだったからだ。

### ■よき祖先となる

クルツナリックの議論のなかでとりわけ注目したいのは、現代人の思考の「病的な短期主義」を「未来の植民地化」ととらえる視点だ。彼によれば、わたしたちはみな過去からのギフトを受け取ることで生き存(ながら)える。



神戸新聞令和8年1月28日朝刊「文化」面 切り抜き整理

道具や生活環境、言葉や制度など、人は過去からの遺産に拠(よ)らずには生きられない。だからこの贈り物には、先行する世代への「恩返し」ではなく、未来世代への「恩送り」として応えねばならない。ところが現代人は逆に、直近の利権にかまけ、わが身第一と考えるなかで、経済成長の名の下に未来の需要を未来世代から略奪し、それを先に食いつぶしている。現代人は、みずからの生の時限を超えてじぶんたちの行為が引き起こすであろう結末をありありと想像することができなくなっている。そしてそのうえで彼は問う。「わたしたちはいかにしてよき祖先となれるか」と。

これは民主主義の時間軸を「いま」から外されている未来世代へと拡張する提案だともいえる。そういう視点は、二十世紀の初頭に、同じ英国の作家、ギルバート・K・チェスタン『正統とは何か』(安西徹雄訳、春秋社)のなかでもすでに提示されていた。民主主義が「いかなる人間といえども単に出生の偶然によって権利を奪われてはならぬ」という主張だとすれば、死の偶然をめぐっても同じことが言えるはずだと。とすれば、現在という時代に不在の人たち、過去の世代と未来の世代にもこの現在における決定への「投票権」があることになる。つまり、長期的な思考とは現在という時点で不在の人たちの立場でも考えるということ、いいかえれば不在の人たちもまた同じ当事者だということになる。

## ■まなざしの反転

しかしこれは、わたしたちに課せられた途方もなく困難な課題である。不在の世代との連帯と言っても、あたりまえのことだがその人たちはもはやいないし、未(いま)だ存在もしない。だから彼らとの連帯と言っても、わたしたち現代人が想像する人たちでしかない。そのかぎりでは結局は、現代人の視圏の内ですべてが決まるのではないということである。

不在の他者たち、とりわけ未来世代の存在はどのようにして確保され、内在化されるのか。未来の世代が、いまを生きるわたしたちがみずからを想像的に二重化した存在にすぎないのではなく、あくまで未来の他者というリアリティを有しうるとしたら、それはどのようにしてか。ここでわたしたちは険しい壁にぶつかる。

あらためてクルツナリクスの議論に立ち還(かえ)れば、「いま」がもつ時間の庭を最大限にまで拡(ひろ)げるといふ提案は、「いま」を不在の未来のほうから見つめるためにこそなされていた。つまり、現在のじぶんたちを未だ存在しない未来世代の「祖先(アンセスター)」としてとらえる、いいかえれば、じぶんたちを未来の他者たちの他者としてとらえる、そのようなまなざしの反転である。

このことがたやすい課題でないのは、それがみずからを「見つめる主体」としてではなく、「見つめられる」他者としてとらえ返すことが求められるからである。「見つめる主体」というありように限界がつけつけられるからである。そのかぎりでは、この態度変換はわたしたちにとってどこまでも民主主義のレッスンとしてある。近接することはできても達成は容易でない目標として。

---

**【わしだ・きよかず】** 1949年京都市生まれ。京都大大学院博士課程修了。元大阪大学総長、元京都市立芸術大学長。サントリー文化財団副理事長。専門は臨床哲学。「モードの迷宮」(サントリー学芸賞)、『聴く』ことの力(桑原武夫学芸賞)など著書多数。

---



上記整理資料のリンク

■【Photo】神戸新聞「汀にて」紙面  
神戸新聞紙面「汀にて」.jpg

■ 神戸新聞紙面「原文」  
神戸新聞 Next (有料です)

<https://www.kobe-np.co.jp/rentoku/culture/202601/0019956970.shtml>

神戸新聞 書き写し整理転記  
2026.1.28. from Koe  
Mutsu Nakanishi